

2019年6月28日(金)

第3会場

会長賞選別講演 (多領域専門職部門) (口演)

会長賞選別講演 (多領域専門職部門) (口演) (II-TRPAL)

座長:落合 亮太(横浜市立大学医学部 看護学科)

座長:青木 雅子(東京女子医科大学 看護学部)

11:00 ~ 11:50 第3会場 (大ホールC)

[II-TRPAL-01] 成人先天性心疾患患者の肥満・やせの状況と心身関連因子

○水野 芳子¹, 立野 滋², 榎本 淳子³, 森島 宏子², 岡嶋 良知², 川副 泰隆², 建部 俊介⁴ (1.東京情報大学, 2.千葉県循環器病センター, 3.東洋大学, 4.東北大学)

[II-TRPAL-02] 小児循環器疾患患者における移行期支援外来の受診効果: ランダム化比較試験の結果から

○森崎 真由美^{1,2}, 鈴木 征吾^{1,2}, 小林 明日香^{1,2}, 岩崎 美和³, 平田 陽一郎⁴, 佐藤 敦志⁴, 犬塚 亮⁴, キタ 幸子^{1,2}, 佐藤 伊織^{1,2}, 岡 明⁴, 上別府 圭子^{1,2}

(1.東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野, 2.東京大学大学院医学系研究科附属 グローバルナーシングリサーチセンター, 3.東京大学医学部附属病院 看護部, 4.東京大学医学部附属病院 小児科)

[II-TRPAL-03] 新生児・乳児期の重症先天性心疾患術後患児の早期離床・リハビリテーション介入

○蔵ヶ崎 恵美, 布谷 千佳, 吉岡 良恵 (福岡市立こども病院 PICU)

[II-TRPAL-04] 新生児・乳幼児期に手術を受ける先天性心疾患患児の口腔機能障害予防～口腔刺激介入による効果～

○阿部 のぞみ, 緒方 幸美, 蔵ヶ崎 恵美, 中島 由美子, 吉岡 良恵 (福岡市立こども病院 看護部 PICU)

[II-TRPAL-05] Fontan術後患者の発達早期の集団参加状況

○尾方 綾¹, 柳 貞光², 小野 晋², 上田 秀明² (1.神奈川県立こども医療センター 臨床心理科, 2.神奈川県立こども医療センター 循環器内科)

会長賞選別講演（多領域専門職部門）（口演）

会長賞選別講演（多領域専門職部門）（口演）（II-TRPAL）

座長:落合 亮太(横浜市立大学医学部 看護学科)

座長:青木 雅子(東京女子医科大学 看護学部)

2019年6月28日(金) 11:00 ~ 11:50 第3会場 (大ホールC)

[II-TRPAL-01] 成人先天性心疾患患者の肥満・やせの状況と心身関連因子

○水野 芳子¹, 立野 滋², 榎本 淳子³, 森島 宏子², 岡嶋 良知², 川副 泰隆², 建部 俊介⁴ (1.東京情報大学, 2.千葉県循環器病センター, 3.東洋大学, 4.東北大学)

[II-TRPAL-02] 小児循環器疾患患者における移行期支援外来の受診効果：ランダム化比較試験の結果から

○森崎 真由美^{1,2}, 鈴木 征吾^{1,2}, 小林 明日香^{1,2}, 岩崎 美和³, 平田 陽一郎⁴, 佐藤 敦志⁴, 犬塚 亮⁴, キタ 幸子^{1,2}, 佐藤 伊織^{1,2}, 岡 明⁴, 上別府 圭子^{1,2} (1.東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野, 2.東京大学大学院医学系研究科附属 グローバルナーシングリサーチセンター, 3.東京大学医学部附属病院 看護部, 4.東京大学医学部附属病院 小児科)

[II-TRPAL-03] 新生児・乳児期の重症先天性心疾患術後患児の早期離床・リハビリテーション介入

○蔵ヶ崎 恵美, 布谷 千佳, 吉岡 良恵 (福岡市立こども病院 PICU)

[II-TRPAL-04] 新生児・乳幼児期に手術を受ける先天性心疾患患児の口腔機能障害予防～口腔刺激介入による効果～

○阿部 のぞみ, 緒方 幸美, 蔵ヶ崎 恵美, 中島 由美子, 吉岡 良恵 (福岡市立こども病院 看護部 PICU)

[II-TRPAL-05] Fontan術後患者の発達早期の集団参加状況

○尾方 綾¹, 柳 貞光², 小野 晋², 上田 秀明² (1.神奈川県立こども医療センター 臨床心理科, 2.神奈川県立こども医療センター 循環器内科)

(2019年6月28日(金) 11:00 ~ 11:50 第3会場)

【II-TRPAL-01】成人先天性心疾患患者の肥満・やせの状況と心身関連因子

○水野 芳子¹, 立野 滋², 榎本 淳子³, 森島 宏子², 岡嶋 良知², 川副 泰隆², 建部 俊介⁴ (1.東京情報大学, 2.千葉県循環器病センター, 3.東洋大学, 4.東北大学)

キーワード：成人先天性心疾患, やせ, QOL

【背景】成人先天性心疾患(ACHD)患者の肥満ややせの現状は明らかでない。【目的】ACHD患者の肥満・やせと関連因子を明らかにする。【方法】20才以上の先天性心疾患患者を対象に、年齢、性別、健康関連 QOLSF-36^R等による質問紙調査と、病名、治療、体重、身長をカルテから把握し Body Mass Index(BMI)を計算した。分析は統計ソフト SPSSを用いた。研究は当該施設の倫理審査の承認を得た。【結果】対象は279名で男性131名、平均年齢は男性30.7才女性34.4才だった。疾患重症度(ACC/AHA2018)は simple33、moderate179、complex67、男性の84.6%(110名)女性の64.9%(96名)が就労していた。肥満 (BMI>25)の割合は男性31.1%女性19.0%、やせ(BMI<18.5)は男性4.7%女性12.7%でありいずれも全国値と有意差はなかった。女性は疾患重症度が高いほどやせが多かった (P<0.05)が男性は関連がなかった。就労の有無と BMIは男女とも関連はなかった。やせの Physical Component Summary Score (PCS)は肥満の PCSより有意に低く、Mental Component Summary Score (MCS)はBMIに関連はなかった。Role/Social Component Summary Score (RCS)は女性においてやせが肥満より有意に低かった(P<0.05)。【考察・結論】肥満は QOLに有意な影響はなく、やせは女性の重症者に多く PCSと RCSが低かった。身体的なつらさが社会的役割に関する QOLに影響していると推察され、肥満は心血管のリスク因子として予防と改善が重要であるが、同様に女性のやせについても栄養や運動、心理など多面的な支援が必要と思われる。

(2019年6月28日(金) 11:00 ~ 11:50 第3会場)

【II-TRPAL-02】小児循環器疾患患者における移行期支援外来の受診効果

果：ランダム化比較試験の結果から

○森崎 真由美^{1,2}, 鈴木 征吾^{1,2}, 小林 明日香^{1,2}, 岩崎 美和³, 平田 陽一郎⁴, 佐藤 敦志⁴, 犬塚 亮⁴, キタ 幸子^{1,2}, 佐藤 伊織^{1,2}, 岡 明⁴, 上別府 圭子^{1,2} (1.東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野, 2.東京大学大学院医学系研究科附属 グローバルナーシングリサーチセンター, 3.東京大学医学部附属病院 看護部, 4.東京大学医学部附属病院 小児科)

キーワード：成人移行期支援, 移行準備性, ランダム化比較試験

【背景】国内では移行期支援外来の介入効果に関する報告はまだない。当院の移行期支援外来でランダム化比較試験を行い、循環器疾患患者への効果について検討した。【方法】2017年7月-2018年11月に当院小児科へ通院している12-18歳の患者を対象とした。2回の移行期支援外来の受診および自身の医療情報をまとめてもらう介入群と、定期受診のみの対照群に割付け、自己管理や受診管理を主体的に行うなど、移行へ向けた患者の準備状況を示す移行準備性(日本語版 TRANSITION-Q:T-Q)の得点で比較した。また、非循環器患者との間で介入群における介入前後の得点変化量について検討した。研究施設の倫理委員会による承認を得て行った。【結果】参加者80人のうち循環器疾患患者は34人(14.3±1.8歳)で、脱落者4人を除き介入後は介入群12人、対照群18人であった。介入後の T-Q得点は介入群55.67±11.70、対照群49.33±14.53(p = 0.03)と介入群で有意に高かった。特に他者とのコミュニケーション、疾患理解について得点変化量が高く、「健康状態を自分で伝える」患者は介入前の4人(33.3%)から介入後の10人(83.3%)へ、「主体的に情報収集を行う」患者は1人(8.3%)から5人(41.7%)へ増加した。一方、受診行動については得点変化量が低く、「一人で診察を受ける」「自分で予約する」ではほとんど変化がなかった。また、非循環器疾患との間で得点変化量に差は認めなかった。【考察】移行期支援外来での介入は循環器疾患患者の移行準備性の向上に有効であり、特に他者とのコミュニケーションや疾患理解における主体性の向上に寄与することが示された。単独受診や診察予約に関する項目では、患者の自立

に対する親の認識のみならず、介入期間の短さが影響した可能性がある。今後は患者家族に対する移行期支援、および移行準備性の長期的変化について調査が必要である。

(2019年6月28日(金) 11:00 ~ 11:50 第3会場)

[II-TRPAL-03] 新生児・乳児期の重症先天性心疾患術後患児の早期離床・リハビリテーション介入

○蔵ヶ崎 恵美, 布谷 千佳, 吉岡 良恵 (福岡市立こども病院 PICU)

キーワード: PICU, 重症先天性心疾患, 早期離床リハビリテーション

【背景】 A病院 PICUに入室する患児の6割は新生児期・乳児期の重症心疾患術後である。重篤であるほど循環動態安定を目的とした深鎮静管理と絶対安静を強いられる。これまで、看護師は患児に対し褥瘡回避目的の除圧を行なうのみで、早期離床を目的とした介入は行えていなかった。【目的】 先天性心疾患術後の新生児と乳児に対し、早期離床・リハビリテーションプログラムとプロトコルを作成、介入により術後早期回復支援となるかを明らかにする。【倫理的配慮】 倫理委員会の承認を得た上で、対象者の両親に同意を得た。【対象と方法】 1) 心臓外科医と理学療法士に相談の上、早期離床・リハビリテーションプログラムとプロトコルを作成した。2) 2018年4月～8月までに入室した対象者50名(非介入群)に対し電子カルテから人工呼吸器装着期間、PICU在室期間、VAPの有無、体位変換開始時期を調査した。3) 2018年11月～2019年1月までに入室した対象者22名(介入群)に対し早期離床・リハビリテーションプログラムを実施、非介入群と同様の指標を調査、比較検討した。【結果】 2群間で人工呼吸器装着期間・PICU在室期間の有意差はなかったが、体位変換開始時期は姑息術児のみ有意差を認めた。VAPは2群とも発生はなかった。【考察】 介入が術後早期回復支援となる明確な効果は認めなかったが、姑息術児の体位変換開始時期が早くなったことは、より早期の介入が可能になったと評価でき、今後、その成果をみていく必要がある。人工呼吸器管理期間・PICU在室期間・VAPには他の要因が影響していることが考えられ、指標の検討が必要である。介入開始と中止の基準を設けているものの、関わる看護師には高度な臨床判断が必要だと考えられる。【結論】 早期離床・リハビリテーションは、重症心疾患術後患児の早期回復支援につながる可能性があるが、今後、その評価をしていく必要がある。

(2019年6月28日(金) 11:00 ~ 11:50 第3会場)

[II-TRPAL-04] 新生児・乳幼児期に手術を受ける先天性心疾患患児の口腔機能障害予防～口腔刺激介入による効果～

○阿部 のぞみ, 緒方 幸美, 蔵ヶ崎 恵美, 中島 由美子, 吉岡 良恵 (福岡市立こども病院 看護部 PICU)

キーワード: 口腔刺激, バンゲード法, 哺乳障害

【背景】 生後半年は哺乳を通して口腔機能を獲得していく時期であるが、先天性心疾患患児はその時期に手術を要し、成長・発達が阻害されやすいと言われている。【目的】 先天性心疾患術後患児に対し経口哺乳制限中から行う口腔刺激が口腔機能障害予防となるか検討し、周手術期患児の口腔機能発達の一助となることを目指す。【方法】 生後6か月までの先天性心疾患術後患児に対し口唇訓練(バンゲード法)を実施(以下、介入群)。口唇訓練導入前の生後6か月までの先天性心疾患術後患児(以下、非介入群)と介入群で術後の経口哺乳開始から経管栄養中止までの日数(以下、経口哺乳確立日数)と経過を診療録より検証、Mann-WhitneyのU検定とSpearmanの順位相関係数で検定した。介入群の家族へアンケート調査を行った。【結果】 全対象者(96例)の術後経口哺乳確立日数と要因を分析した結果、挿管日数が長いほど経口哺乳確立日数が長かった。非介入群(74例)と介入群(22例)では経口哺乳確立日数に有意差はなく、口唇訓練実施回数と経口哺乳確立日数間の相関関係もなかった。非介入群・介入群とも月齢・術式による経口哺乳確立日数に差はなく、月齢・術式で介入による経口哺

乳確立日数に有意差もなかった。しかし、介入群の家族へのアンケートでは手術前後の哺乳の様子の違いについて、63%が術後の方が良く飲んでいると回答した。【考察】有意差が出なかった要因として、介入期間の短さ・介入方法・効果の検討基準・介入対象者の背景が考えられた。そのため、介入方法や期間を再考し継続的に行い評価する必要があると考える。アンケート結果は肯定的な意見が多く、家族にとって哺乳は大きな関心事項であることがわかった。【結論】本介入について家族の満足度は高かったが口腔機能障害予防に明らかな効果はなかった。今後他病棟・歯科との連携を強化した継続的な介入等、方法を検討することで口腔機能発達の一助となる可能性が期待される。

(2019年6月28日(金) 11:00 ~ 11:50 第3会場)

【II-TRPAL-05】Fontan術後患者の発達早期の集団参加状況

○尾方 綾¹, 柳 貞光², 小野 晋², 上田 秀明² (1.神奈川県立こども医療センター 臨床心理科, 2.神奈川県立こども医療センター 循環器内科)

キーワード：Fontan術後, 新版K式発達検査2001, 集団参加

【背景】先天性心疾患の患者の生存率が向上し、患者のQOLへの関心が高まっている。【目的】Fontan術後患者の発達早期の集団参加状況を考察する。【方法】対象：A病院で2013年9月～2018年12月に新版K式発達検査2001(以下K式)を2回以上実施した30名。初回検査時の平均年齢2歳0ヶ月(1歳6ヶ月～2歳8ヶ月)、2回目検査時の平均年齢3歳2ヶ月(2歳11ヶ月～4歳2ヶ月)。方法：検査時の集団参加状況と発達検査結果の関連を検討した。K式は標準(DQ85以上)、境界(70～84)、遅れ(69以下)とした。【結果】初回検査時に集団参加していた児は17名(56.7%)であった(保育園10名、療育機関1名、プレ幼稚園1名、その他5名)。集団参加していた児の発達検査結果は、全領域DQは標準8名(47.1%)、境界5名(29.4%)、遅れ4名(23.5%)であった(平均82.7)。2回目の検査時に集団参加していた児は25名(83.3%)であった(保育園・幼稚園16名、療育機関6名、プレ幼稚園4名、その他3名。複数回答あり)。集団参加していた児の発達検査結果は、全領域DQは標準11名(44%)、境界域9名(36%)、遅れ5名(20%)であった(平均84.6)。【結論】平成25年度の厚生労働省の調査によると、0～2歳で保育園を利用する児は約3割、3歳で保育園、幼稚園に就園している児は86.1%とされる。今回の調査では3歳までに保育園を利用している児の割合はFontan術後患者でも一般的な割合と大きく変わらず、発達早期から集団参加する児がいることがわかった。しかし保育園、幼稚園に限った場合2回目の検査時に就園している児は53.3%であり、一般的な割合を下回っていた。発達に遅れが見られる児もおり、療育機関の利用も見られた。発達早期から検査を通して適切な機関へつなぐことも重要と考える。